

俞 晓凯

YU Xiaokai



ドキドキ (My heartbeat)

ミクストメディア、映像、シーツ

## ドキドキ (My heartbeat)

修士修了作品は『ドキドキ』というタイトルで、「庄周夢蝶(zhuāng zhōu mèng dié) (日本語訳: 胡蝶の夢)」をモチーフとして制作した。パフォーマンスの映像から成るインスタレーションとパフォーマンスで用いたシーツから成るインスタレーションだ。映像では、筆者自身のアイデンティティにおける、自らの本音、両親の考えなどについて、夢の中で告白するような表現となっている。

これまでは、海外で作品を発表することで、筆者のアイデンティティに関わる表現とその内容を知ってもらう機会を得てきたが、家族がそれらのことをどのように理解しているのかは、まだわかっていない。家族とは「同性愛者」「ステレオタイプの結婚観への否定」「性的感染症」などについての会話は難しく、筆者はずっとこのような話題をタブーとして避けて家族に接してきた。

しかし、LGBTQ+への理解に対する世代間ギャップについては、その状況を認めて考えていくことが必要なことだ。そこで、現実では話しにくいことを映像の夢の中の表現により、普段両親に自白していないことを吐いた。映像の中では、故郷の浙江省の方言と標準語(マンダリン)によるバイリンガルなナレーションを流した。方言による家族間での会話と筆者が伝えたいことをミックスした内容になっている。

また、映像のほかにインスタレーションを構成するシーツは、寝具としての休息と治療、性行為に関わるイメージが含まれている日用品として用いた。映像の中で筆者はそのシーツに横たわり、パフォーマンスを行った。筆者は動きながら、身体に対して、病の辛さと痛みの境界も探求した。敷いたシーツにはドットをひたすら描き、洗い、描き…というプロセスの繰り返しにより、性感染症の再発と切なかつた記憶を洗い流したいという日常では隠された願望を表現した。

この作品を通して、筆者の個人的な無力感、自由に生きていきたいという希望と家族との間の葛藤を表現したことで、「家族における現実のステレオタイプ」と「私の夢の本音」の正しさが曖昧になり、現実と理想の区別がつかなくなっていくような表現になっている。そして、「夢の中の私」は性感染症の辛さを超え、マイペースで生きていく人間であり続けられるが、目覚めると、また罹病の事実、闘病の不快さと家族に多様な性のあり方の存在を認められない現実に陥ることとなる。

「事件現場」をメタファーとした皺のあるシーツには何が起きたのか。夢枕に立つことと同じように自らの考えを筆者の両親の夢の中に表したい。不思議で予想外なことだと思われるけれども、現実として、理解してもらいたい。現実で理解を得られれば、もう夢ではなく、より良い理想郷がどんどん近づいてきたのではないか。